特46
391

神道天理教大意の首に題す

日月星辰の天に麗き鳥獸蟲魚の地に息する皆天理に外なるなし天理は一なり此理を導くは神の教にして此教に遵ふは人の道なり万國の多き皆然らざるはなし而して我國を最とす神國の稱豈に沒すべけんや近來道に背き教に違ふもの多し私に以て憾とす偶ま此著を見る神に代りて教を施すものとしふべし人心蓋し此理に一ならん喜んで題す

明治丙申陰暦上巳節

樂天道人

日本唯一

神道天理教大意

目次

○第一章　何をか天理教といふ
○第二章　我國は神國なり
○第三章　天理教は世界宗教中最良の宗教なり
○第四章　天理教の祭神
○第五章　祈禱幷禁厭
○第六章　天理教の道德

目次終

日本唯一

神道天理教大意

天籟居士著

第一章　何をか天理教といふ

天理教を信仰なさる御方は世間に澤山ございますが、實際、天理教の譯柄を知りて信仰なさる人は少ないやうです、天理教を識る人も亦多く御座いますが、これは少しも天理教の有り難きことを知らぬからです、譯を知らずに信仰する人も、餘り賞められた話では御座いませぬ知らずに識るとは、極々惡いことです、古き歌にも

習ひつゝ見てこそ知るれ習はずて
よしあしいふは愚かなりけり

と申してあります、兎角、物事は當りて見なければ分りませぬ、詰らぬと思ふた事も、能く〳〵聞いて見ると、存外、眞理の籠つたことがあるものです、世には食はず嫌ひと申して、甘味か不味か食ても見ずに、無闇と嫌ふ人があるものですが、これは大きな僻事です、天理教に就ても、矢張、この食はず嫌ひのないとは限りませぬ、否、隨分多くあるかと存じます、美味ありと雖ども、食はざれば其味を知らず、善教ありといへども、聞かざれば何ぞ其善惡を知るを得んやです、

通るべき道はさすがにあるものを
知らばやとだに人の思はず

この知らばやとだに思はぬ人は、何とも仕方が御座いませぬ、佛者も緣なき衆生は度し難しと申して居ます、斯る人に教理を說くは、全で

盲者に大陽の話をして聞かす樣なものです、銅盤の樣な圓いものだと教へれば、敢いて見て、ヂヤン〳〵音のするものだなと考へる、蠟燭の如く明るいものだといへば、撫で〻見て、ハ、ー、細長いものだなと心得て居る、イヤハヤ愚夫愚婦の曉し難きは實に困つたものです

一聲もほと〻ぎすより聞きたきは
まことの道をかたる世の人

この心得ありてこそ、始めて共に道を語るに足るべき人でございます、吾嘗終日不食、終夜不寢、思之不得、不如學也、誠に道は學んで至るべきものにて、何より修業が肝要でございます。

さて天理教と何樣な教へであるかといふに、我が國人の必ず信仰せねばならぬ、日本唯一の神道で御座いまして、神ながらの道を教ふる教

法でございます。

凡そ國を異にすると共に、風俗習慣を異にせざるを得ませぬ其風俗習慣が異なると共に、又其道德を異にします、支那には支那流の道德があり、英國には英國流の道德がある、其他、佛國にまれ、獨逸にまれ、米國にまれ、皆其國々によりて、モーラルの標準が違つて居ます、これは自然の勢ひで、建國の狀況の異なるにつれ、風俗習慣の異なるにつれて、是非、斯くなければならぬで御座いまず、うして此相違が頓て國民の氣風の上に顯はれて參ります、これを英語でナショナリティと申します、このナショナリティなるものは、即ち國民の精神を一貫せる、大々的信仰でございます、我國のナショナリティはと申しますれば、敬神愛國の四字の外はございませぬ、神を敬するも即ち

皇室を尊び、皇室の御先祖を敬し奉る所以にて、所謂、忠でございます、我々の祖先は斯くして我が國土を九鼎大呂よりも重からしめしものにて、我々が其遺訓を守りて渝にざるは、これ孝の至大なるものです、此心は延て我が國土を愛するの念となる、我が國人一致の基ともなります、敬神愛國、實は四字に似て四字でない、單に敬神の二字に止まるので御座いまず、忠といひ孝といふも、敬神の二字に胚胎せることで、所謂、忠孝一途でございます、この道は佛教渡來以前、儒教傳來の以前より傳はれる道にして、即ち神ながらの道でございます。我國が二千五百有餘年の久しき、巍然として東洋の表に國を成せるもの、實にこの道の存ずるに依ることで御座います。

さて宗教と申しますものは、國民、信仰の上に立つものですから、最

ゝ能く建國の要旨に適ひ、ナショナリチイに適合したものでなければなりませぬ、而して我日本のナショナリチーハ前にいへる如く、神なからなる敬神愛國の道なりとすれば、これに適へる天理教は、我が國人の信仰すべき、最もよき教で御座います。

第二章　我國は神國なり

我國は神國と申しまして、實に結構なる御國で御座いますれば、我々は常に神樣を信仰して其御恩を謝さねばなりませぬ、この地球の上に國を成せるものは、實に夥しき事でございますが、我が日本帝國ほど結構な國は、外には一つもございませぬ、されば西洋人も、日本を指して「世界の天國」と申しました、天國ー實に天國でございます、地理上より見ましても、歴史上より見ましても、天國の名に背かないで

す、我々がこの結構なる國に生れ來りたるは、偏に神樣の御蔭によることで御座いますから、片時も其御恩を忘れて、信心を怠りてはなりませぬ。

我國の世界萬國に勝れて、結構なる國柄なることは、今更ら申すまでも御座いませぬが、序なれば一つ二つ話して見ませう。

我國の地勢は、西南に起りて、縱斜線に長く東北ゝ延びて居ます、ゝれ故、全く温帶圏の中にあるのでは御座いますが、南の端は熱帶に近く、北の端は寒帶に迫りて居るです、ゝこで、國内の土地氣候に著しき相違があります、此相違は實に大切のことで、之れあるが爲めに、我國は海陸共に諸種の動植物に富で居るでございます、熱帶圏に生息すべき魚藻もあり、草木もあり、又寒帶地方に生息すべきものも澤山

ございます、温帶圏に生息すべきものは固より申すまでもございませぬ、例へば、鯨、膃肭獸、臘虎の如きものより、海鼠、蠣、鮑の如き類、米、麥、豆、の如き穀物は申すに及ばず、砂糖、木綿、桑の如きもの、松、栗、桐、杉、檜の如き良材など、其産額實に夥しきことでございます、又、山には礦物が澤山でございまして、佐渡の金山、生野の銀山、足尾の銅礦、幌内、高島、三池の炭礦など、一々かぞへも尽くせぬ程でございます、此他、尙ほ發見されぬ礦坑も澤山あらうと存じます、斯の如く、我國は五穀よく實り、草木よく繁茂し、金銀も澤山でございまして、結構この上もなき國でございますから、古より瑞穗の國とも、心安國とも申しまして誠に衣食住、何一つ欠けたるものなき、安心なる國でございます、殊に景色のよきことは、世界萬國、何といつても、日本に及ぶ國はございませぬ。

富士の高嶺に降れる白雪、朝日に輝きて、きらきらときらめくさま、うれが何樣に尊いでせう、花に埋るゝ吉野山に霞たなびく春景色、うれが何樣に優美でせう、水には卽ち近江の琵琶湖、春の白帆に秋の月、何樣に樂しく見ゆるでせう、白砂青松の舞子の濱、朱欄碧樓の嚴嶋、其他、天の橋立の如き、松島の如き、日光の如き、須磨の浦、和歌の浦の如き、若しくは龍田の紅葉、月ケ瀨の梅、到底、數へあげることは出來ない程でございます。

誠に海陸の富をいひ、風光の美といひ、天下無比の樂土でございます、この無上の樂土は誰れの住居場所でございませう、我々日本人ではございませんか、なんと、我々は仕合せな人間ではございませんか、

斯く仕合せな人間に生れましたは、果して誰れの御恩でございませう、申さずともものこと、皆、神様の御蔭でございます。

茲に我々の最も注意すべき、大切なることがございます、うは我が國体の世界に卓絶せることでございます、外國にては支那を始めとして、何れの國にても、君統屢々變更し、或は國外より入りて帝位を奪ひしものもあり、匹夫より起りて帝位に登れるものもあり、甚だしきに至りては、一國の君主でありながら、斷頭場裏の鬼となつたものもございます、然るに我が日本帝國ばかりは、昔し神々様がこの御國を始め玉ひしよりこのかた、今上天皇陛下の大御代に至るまで、皇統連綿として、曾て一たびも變りしことはございませぬ、さるからに、今上天皇陛下は神様の御子まして、生ながらの神様、あらひと神でご

います、うして、我々は神様の直の家來でございます、御歴代の天子様は皆神様の大御德を備へ玉ひ、御仁聖に在まして、人民を慈しみ玉ふこと子の如く、人民も亦忠義を尽して御德に懷き奉り、未だ一たび も敬愛の情を失ふたことはございませぬ。如何に殘忍なる武士でも、皇室に向て弓を挽く様なものは昔しから一人もございませぬ、虎の如く狼の如き桀兎でも、一たび錦の御旗を拜しまずれば、羊の如く狗の如く靡き從ひます、深山に樵る樵夫も、荒野に牧ふ童も、天子様の貴きことを知らぬものはございませぬ、斯くの如く、天子様と人民との間柄の睦じきことは、世界萬國、何れの國にも例のなき所でございます。この道は實に神代の昔しより今日に至るまで、渝ることなき御教にて、所謂、神ながらの道でございます、この美にして善なる御教は

我々の永遠に保つべきことでございまして、又我々の最も世界に誇るべきことでございます。我國を神國と申しますも、神代のまゝに濟されざる、この道の存ずるに依ることでございますれば、我々は何時々々までも、この神樣の御教へに遵ひ、神ながらの道を守りて、敬神愛國の旨を忘れぬ樣に心掛けねばなりませぬ。

第三章　天理教は世界宗教中最良の宗教ふり

始めて洋燈の流行せし頃は、誰れも使ひ馴れない爲めに、種々の苦情を述べて、これを嫌ひました、油が臭くて鼻向けがならないの、火事の患ひが多いの、ホヤガ破れて困るの、神樣がお嫌ひあさるのと、種々雜多な、惡口を申しましたが、使ひ馴れて見れば、なか〳〵便利なもので、行燈や紙燭は及びも付きませぬ、處で追々買人が殖えて、今では至る所、これを使ふやうになりました、凡ての事がこれと同じ道理で、始めの内は、兎角、彼れこれいひたがるもので御座いますが、實際、優れたものは遂には劣りたものに打ち勝つが、世界の通理でございます、これを優勝劣敗とも、適者生存、不適者消滅とも申さまして、如何な物でも此原則に戻ることを得ないで御座います、人力車が出來て駕が廢れ、滊船が出來て帆前船が廢れ、郵便が出來て江戸飛脚が廢れ、電氣燈が出來て瓦斯燈が光りを失ひましたも、皆この原則の爲めに驅られたので御座います、動物でも植物でも、乃至、人類でも無形の學術でも、決してこの原則に逆ふことは出來ないでございます、見玉へ、劣等なるアイヌ人種の如きは漸次、消滅の兆あるに反して

、本邦人は日に月に繁殖するではございませんか、かのハワイ人、印度人の如きも、今後五十年を經れば、悉く其跡を絶つであらうといふが、殆ど今日の定論の如くなつて居ります。

凡そ世界の事物は、時と場所とを問はず、激烈なる生存競爭も絶えず行はれて居るでございます、而して其結果はと申しますれば、いつまでも優勝劣敗の原則に遵ふて居ます、でございますから物の優劣を判定いたしますには、其結果に就て見るが、第一の捷路でございます。

さて天理教は如何なる狀体であるかといふに、始めの程こそ、かれこれ世論をも招き、嘲笑をも受けましたれ、今では非常に信徒が殖えまして、現時日本に行はるゝ宗教中、實に最上位を占めて居るでございまして、天理教の信徒は最近十年の間に、殆ど四百万といふ夥しき數に達しまして、實に我國人口の十分一を占めて居ます、なんと盛なことではございませんか、この勢ひで進んで參りませうものならば、今後二十年を經ない内に、世界の半ばを擧げて天理教の信徒たらしむるは實に容易な業で御座います、斯くも天理教が、大々的長足の進歩を以て、社會を教化しつゝある所以のものは、果して何に由來するのでございませう、生存競爭の劇烈なるこの活社會に立ちて、常に勝者の地位にあるは、果して何に由るのでございませうか、天理教が凡ての宗教に優されて居るからではございますまいか、最優者たることを証するものではございますまいか、私は天理教の優れることを證據だてるに、充分であると存じます、うれも其筈のことでございます、何故かなれば、天理教は學理の最も進歩せる、十九世紀の末に於て、併も東

洋の最文明國なる、我日本帝國に生れ出でたる宗教でございますから、固より善くなくてはならぬ譯でございます、諸君、試みに考へても御覽なさい、釋迦の生國なる印度の人民は、現時如何なる狀体でございますか、基督の本國たる猶太人は、世界で如何なる位置を占めて居りますか、印度人が已に絶滅の期に近けることは、前に申した通りで御座います、されば猶太人はといふに、これ亦あはれ果敢なき狀況でございます、猶太といへば、奴隷を意味し、賤民を意味し、輕侮を意味するの語たるに於ても、大抵、相場は知れて居ます。倘し哲學家の泰斗、スペンサーが論證せるが如く、社會は常に進歩するものなりとすれば、野蠻より文明に進むものなりとすれば、印度が三千年の昔に於て、猶太が二千年の昔に於て、如何に幼稚なる境界でありしかは、

大抵、推測することが出來るであらうと存じます、この野蠻蒙昧なる時代に於て、併も世界の賤民の手に於て、開始せられたる宗教が、果して今日文明の社會に適合して居るでございませうか、最も敏捷怜悧なる、我日本帝國人民の信仰すべき宗教でございませうか、決して其樣な理窟はないでございませう、之れに反して、天理教を文明の世の中に生れたものでございますから、最も開けた教へでもあり、我國のナショナリティにもよく適ふて居ます、而して凡ての宗教中最優者でございます、無信仰者は例外として、苟くも宗教心のある人は、必ず天理教を信じなければならぬことでございます。

第四章　天理教の祭神

天理教にては、天理王の命を祭り奉るといふことは、誰れも知る所な

れども、扨、天理王乃命とは如何なる神様を申し奉るかといふことは、知らぬ人が多い樣で御座います、天理王の命と唱へ奉るは、左の十柱の神々樣を總稱せるもので御座います。

國之常立神　豐雲野神
意富斗能地神　大斗乃辨神
淤母陀琉神　阿夜可志古泥神
國之狹土神　月夜見神
伊邪那岐神　伊邪那美神

以上十柱の神々でございます、これ等の神々樣は我々の住へる地球を始め、禽獸艸木、魚介菜藻、總て人間衣食住に必要なる物を造り玉ひ、何不足なく、暮すことが出來る樣なし玉はりたるものなれば、我

々は一日も其御恩を忘れてはなりませぬ。

伊邪那岐、伊邪那美、二柱の神は、誰れも知れる如く、我々人間を造り玉ひし神にて、我々の御先祖で御座います、されば此二柱の神を大切に祀き奉るは、取りも直さず、先祖へ御孝行、皇室へ忠義と申すもので、我が建國の御旨意にも叶ふ譯でございます。

人は自分の働きで食べたり着たり仕て居ると思ふは、大きなる間違ひでございます、人間の力では、草一本、木一本、出來るものではございませぬ皆神樣の力を籍るのでございます、昔しから火水風土と申しますが、實に此の水や空氣や土や、ろれに大陽の光りと熱との力が添はりて、始めて萬物が育つことで御座います、此の水や空氣は人の手に依りて造ることは出來ませぬ、中には生意氣な人がありて、總ての

物が神樣の力で出來ると心得て居たのは、理學の開けぬ昔しのことで、追々理學の進むと共に、世界の不思議が少なくなつた、うれと同時に、これ迄は神樣の御蔭とばかり心得て居たことも、ヅン〳〵人力で出來る樣になりたれば、此上、神樣のことなどいふは、迷ひといふものであるなどゝ、申す人もございますが、これは其一を知つて、其二を知らぬものでございます、成程、水は酸素と水素の化合物であるとか、これまでは鬼神の如く恐れたる雷も、電氣の働きであるとかいふことは、研究の結果として發明も出來たれど、何故に酸素と水素が化合すれば、水を起すか、或物と或物とは化合するも、或物は化合せざるか、或仕方に依れば、何故に電氣を起すかといふことは矢張不明である、うればかりではありませぬ、人智は如何に進歩するも、無より

有を生ずることは出來ませぬ、茄子の種を蒔けば茄子が出來、胡瓜の種からは胡瓜の蔓が生へて胡瓜がなるも、人間の力では出來ぬことでございます、世の中の森羅萬象、凡て此通りで、如何に人間が賢うなりて、理學が進歩しても、世界の不思議の減ずるといふことはなく、却て何事も整然と規則正しく、神樣の支配でも受けねば、自然よ斯く整ふて居る道理がないと、益々神樣を信ずる樣になるばかりでございます、試みに天を仰いで御覽なさい、天も際涯もなく宏大なものではございませぬか試みに地を俯して御覽なさい、禽獸艸木魚介昆蟲を始めとして、無數のもの散布してあるではございませんか、山は巍然として高く、海は洋々として深く、各々其處を得て整然たる狀況、これが人間業で出來ることで御座いませうか、春暖かに夏暑く、秋は涼し

く冬寒く、四時の遷り變り一度も違ふことなく、鳥歌ひ花笑ふ頃より、葉茂り實を結び、木葉枯れ落ちて蛇穴に入る時に至るまで少しも順序を誤ることなきは、なんと不思議ではございませぬか、これでも神様の御蔭でないと申されませうか、天理教にて祭る神々様は、即ちこれ等、天地萬物を造り玉へる方々でございますれば、苟しくも天地の間に生を稟けたるものは、必ず信仰せねばなりませぬ。

第五章　祈禱并禁厭

前章に於て、人は神様の御蔭でなくば立ち行かぬものである、人力には限りのあるものであるといふことを申述べましたが、斯る譯からして、祈禱や禁厭の必要が起ります。

今年は稻がよく出來たと、喜んで居ても、八九月の頃、暴風雨が一つ

來ようものなら、折角、丹精こめて作つたものも、一夜の内に玉なしになります、サア洪水だとか、地震だとか、旱魃、疫病其外いろ〳〵の天災地變といふものがあつて、一日も油斷はなりませぬ、斯る災禍を免がるゝには到底人間の力では及びもないことでございますから、是非とも神様に縋らねばなりませぬ、神様は天地萬物を造り玉ふ程のものゆゑ、天災を防ぎ、地殃を鎭め、惡魔、災厄を祓ひ玉ふ位は何でもなきことでございます、神様はお醫者はなさらぬゆゑ、祈禱や禁厭で病氣が癒る筈がないなどゝいふものあれど、うれは生意氣と申すものでございます、神様は形のなき物から、この丈夫なる人間を造り玉ふ程の大能力を有せらるゝことなれば、病氣の癒る位なことは、手間隙の要らぬ譯でございます、例へと申せば、蒸氣機關を造ることの出

來る人には其破損の箇所を修覆する位は、容易く出來ると同じことでございます、されば人ハ神樣を信仰して、其力に縋りて行きさへすれば、病氣も災難をも免れて、無事息災に樂しき月日を送ることが出來ます、併しながら茲に一つの注意すべきことが御座います、それは外のことでもありませぬが兎角神樣を信じ過る人は、人間の務を欠ぎて置て、一圖に神樣ばかりを宛にすることでございます、これは大いなる間違ひで、無理と申すものでございます、教祖も『無理な願ひはしてくれな』と御示しになりて居ます、病氣ならば、醫者も雇ひ、藥も飲み充分養生もして、さて其上、人間の力の及ばぬ所を、神樣にた願ひ申してれ助けを受けるが人の道でございます、人の力で出來ることをもせずして安りに神樣に無理をいふは、寢て居て金儲けをさして欲しいと賴むやうなものでございます、田の草も取らず肥料もやらず、打捨て置て、五穀成就の祈禱をしたとて、商賣を忽かにして金儲けを祈つたとて、神樣は其樣な無理な願ひをれ聞きなさる氣遣ひはございませぬ、藥も飲まず養生もせず、うして病氣平癒の御祈禱をしたからとて、うれは賴む人の無理といふものであります何事も人間で出來ることは、爲るが人の務めでございます、神樣には人手で出來ぬことをれ願ひ申すべきものでございます、斯くいはゞ、うんなことなら、別段神樣を賴むまでもないことじやといふ人もありませうが、なか〳〵左樣いふ譯のものではございません、如何に油斷なく働きましても、養生を守りましても、災難といふものは別でございますから、貧乏しないものでもなく、病氣になるまいものでもありませぬ、斯く自分は

其務むべき所を務めても、自然に來たる災難といふものがありますから、うこを神樣に賴みて守りて貰ふので御座います、此處の道理はよく〳〵合点して、無理な願ひをせぬ樣に心掛けねばなりませぬ、これ教祖の誡めでございます。

第六章　天理教の道德

凡う教といふ以上は、必ず道德といふものが伴はなればなりませぬ、佛教にまれ、耶蘇教にまれ、皆うれ〳〵特種の道德があります、人間はこれに依りて其品位が定まることでございます、佛教的道德でも、耶蘇教的道德でも、惡いとは申しませぬが、何しろ日本人を目標として立てたものでもなく、明治の昭代を標準として說いたものでもありませぬから、我が建國の御趣意と衝突する所が澤山あります、先年來

各種の學校にて、恐れ多くも　陛下の御肖像に對して不敬を加へたる人が四五人も御座いました、これ等は卽ち耶蘇の教義と我が國體とが衝突せる、顯著なる證據でございます、我天理教は日本の中央なる大和の國に於て、而も明治文明の大御代に於て、生れ出でたる宗教でございますから、我日本帝國人民の品位を有つまで於て、最も適合せる道德でございます、天理教道德は、御神樂歌の內より、最も平易簡明に說き尽して御座いますが、これは後日に委しき衍議を著はす積りでございますれば茲には其大略を述べませう。

君臣

我日本帝國は昔より我皇室と與に起り俱に進みて二千五百有餘年の久しきに涉りしもので、我々は、祖先以來、代々一日も天子樣の御

恩を蒙むらぬものは御座いませぬ、されば我々は飽までも皇室を戴きて、深く忠義を心肝に銘し、祖先以來の鴻恩に酬ひなければなりませぬ。

父子

凡そ人と生れては、身体髪膚一として、之を父母に受けぬものはありませぬ、父母の我を生み我を育て玉ひし苦勞といふものは、並大抵のことではありませぬ、父母の御恩は海よりも深く山よりも高きものなれば、子たるものは、常に其御恩を酬ゆることを心掛けねばなりませぬ、父母へ第一の孝行と申すは、身体を傷なはぬ樣に用心して、父母に心配を掛けず、進みては身を立て道を行ひ、名を後世に揚げて、父母を顯はすことで御座います、此道は實に神樣より傳はれる、大切の教なれば、一日片時も忘れてはなりませぬ。

兄弟

兄弟は同じ父母の骨肉を分ちたるものなれば、親みの最も近きものなり、されば互に相親み、相愛し相助け相救ひて、父母の音容を拜するの想ひをなし、樂みて力となり合ひ、倶に幸福を願はねばなりませぬ、兄弟仲の惡きは家を亡す基にて、不祥之れより大きなるはありませぬ。

夫婦

夫婦は人倫の大綱といひて、父子君臣兄弟朋友等すべて夫婦ありて後、始めて出來るものにて、夫婦は人倫の始めでございますれば、最も愼まねばなりませぬ、うれゆゑ、御神樂歌にも夫婦のことを

、開巻第一に記してあります、古語にも夫唱へ婦隨ふとありて、夫婦は影の形に添ふが如く、互に和合して、一家の幸福を全うせねばなりませぬ、夫婦仲惡く常に浪風たつやうでは、唯其身面白からぬばかりでなく、子たるものも父に從へば母に背き、母に從へば父に背き、孝行しようにも仕方がなくなります、うれやこれやで家風といふものは紊れて仕舞、何も角も滅茶苦茶となります、されば夫婦は深く此意を念ひ、和合を欲ぎてはなりませぬ。

朋友

誰れに限らず我一人にて世に立つことは出來難きものにて、必ず親切なる朋友の力を籍らねばならぬものでございまして、廣く朋友に交りて其助けを得なければ、見聞狹くして頑陋なる人となり何事も成就するものではございませぬ、うれゆえ朋友は兄弟に次で大切なものでございます、朋友には骨肉の親みといふものがございませぬゆゑ信義を第一として、言行一致、相欺き相陷るゝ等のことなき樣に交らねばなりませぬ。

此他大切なることは澤山ございますが、うは後日御神樂歌の解を著す時、委しく述る積りなれば、茲には畧しました、讀者之れを諒せられよ。

日本唯一神道天理教大意　終

明治廿九年四月廿四日印刷
明治廿九年五月六日發行
（定價五錢）

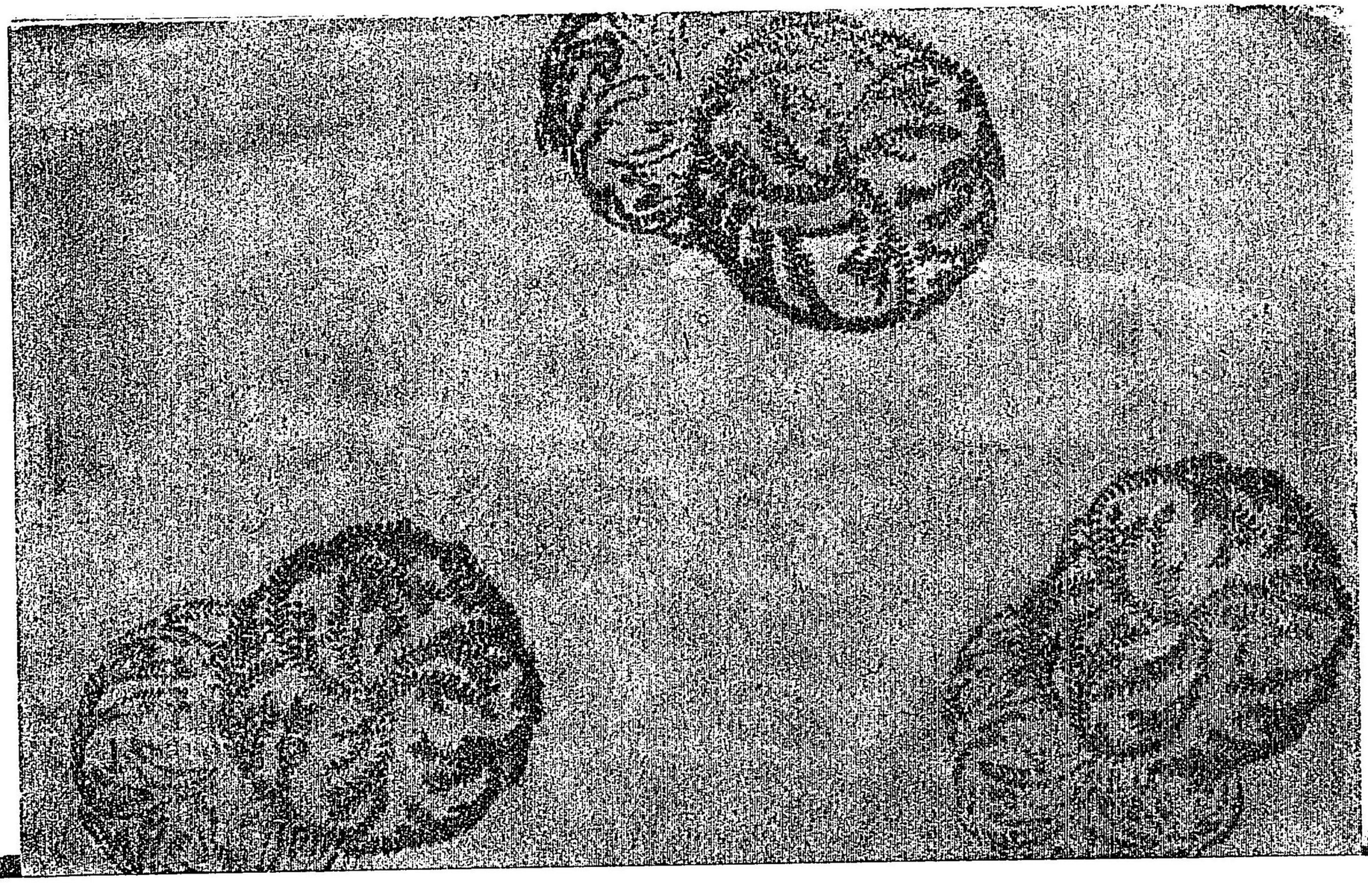
著作兼發行者　奈良縣大和國添上郡帶解村大字今市八十五番地　井久保定吉

印刷者　大阪市東區和泉町貳丁目八番邸　前野茂久次

大賣捌所　大和國山邊郡丹波市大字三島天理教會本部御門前　高田書店

書肆　北田書店

全所



163
392

014255-000-3

特46-391

神道天理教大意（日本唯一）

井久保　定吉（天籟）／著

M29

ABB-0590